

ポ プ ラ と 蛇

—フロベールにおける聖と俗の動植物学—

岩 見 至

はじめに

小説には場面あるいは背景を点綴するものとして種々さまざまなものが登場するが、動物や植物もその有力な要素である。どういう動物や植物が登場するかは、作家により作品により不定であること論を俟たないが、時としてそれらの動植物が単に偶発的な添え物でなくて、作品の特性やテーマに深くかかわることがある。プルーストにおける植物——山査子やリラなど——の例を人はすぐに想起することができよう。小論ではフロベールの若干の作品において、いかなる動植物が登場し、それらが作品の本性にかかわりがあるか否か、あるいはそのかわりが有意味なもの

であるかどうかについて多少の探りを入れてみたい。

一

ここではとりあえず『ボヴァリ夫人』『感情教育』『聖アントワーヌの誘惑』『聖ジュリヤン伝』『まごころ』^①の五作品をとりあげる。初期作品を含めすべての作品を対象としなかつたので不徹底ではあるが、差し当りヒントを掴むのに有効性はあるものと考ええる。まず上記作品中に見出される動植物の種類をみると次のような数字になる。^②

ボヴァリ夫人 動物 約五十種

植物 約八十五種

感情教育 動物 約五十五種

植物	約七十五種
聖アントワース	動物 約百十種
	植物 約四十五種
聖ジュリヤン	動物 約七十五種
	植物 約十種
まごころ	動物 約二十種
	植物 約十五種

作品には長短があるので種類が多いか少ないかを同列には論じられないが、筆者の主観的印象では一般にフロベールの作品に登場する動植物の種類は多い方ではないかと思う^⑧。上の数字でまず見られることは、「ボヴァリ夫人」と『感情教育』においては動物より植物の種類の方が断然多く、逆に『聖アントワース』『聖ジュリヤン伝』『まごころ』では動物の方が植物より圧倒的に多いということである。

次に個別動植物の出現頻度数はどうかであろうか。『ボヴァリ夫人』『感情教育』中に登場する動物で最も多くでてくるのはいずれも馬であり、二位も同じく犬である。以下牛とか鶏とか、いずれにしても比較的日常よく接する動物が多い。トップの馬だけは群を抜いて多く、前者において六十回以上、後者においても四十回以上出現する。これに對し植物の方では、『ボヴァリ夫人』における最上位はボ

プラ、バラ、いばら、『感情教育』におけるそれはバラであるが、いずれも十回に達しない。二位以下には樅、菩提樹、葡萄、仙人掌、ポプラ、柳、リラ等が並ぶ。

『聖アントワースの誘惑』『聖ジュリヤン伝』『まごころ』における動物は、蛇、鹿、鸚鵡がそれぞれ一位であるが、二位のライオン、スフィンクス、鷹、馬、犬等でもあるいは三位の動物でも概して植物の頻度一位のものより高い数値を示している。これに對し植物の方は、『聖アントワース』において葡萄が十回を越えるが、あと上位のバラ、いばら、棕櫚、葦、はす等三作品のいずれにおいても十回以下である。

つまり五つの作品を通じて共通にみられることは、動物のうちの特定ものが出現頻度が高く、それにくらべれば植物の方にはきわだって頻度の高いものは見当たらないということである。また動物の方では、馬、牛、犬など、植物の方ではバラ、いばら、葡萄、すみれなどが可成り共通に複数回出現する。各作品の動植物で一回限りしか出現しないものがそれぞれ相当数あり、数値の小は必ずしも無意味を意味しないであろうが今はふれない。共通に見出される動植物についていえば、やはりそれらが人間の日常生活に比較的密接なつながりがあるものといえるだろう、強いて

いえば十九世紀のヨーロッパの人間にとってということであるが。

さて以上のことをひっくり返ると、頻度の高い動物はその作品の何かを表わしているのではないか、性格とかテーマとか意図とかに相応の関聯があることをほのめかしているのではないかと思わせる。

二

次にやや具体的にそれらの動物たちが作品に登場するさまを眺めてみよう。

『ボヴァリ夫人』と『感情教育』において馬が断然多く登場する理由は、それぞれの作品の冒頭部で最初にそれが登場する場面をみれば了解出来よう。

農業のことをかいても知らぬのはインド更紗の製造の場合とかわらず、馬を農場へやって働かせずに自分が乗りまわし、^④

やがて、二頭立の四輪馬車が彼を乗せて走り去った。

馬は二頭とも彼の母のものではないのだ。自家の馬と並んでつけるために収入役のシャンブリヨン氏の馬を借り

たのである。^⑤

引用の前者はシャルル・ボヴァリの父親について説明した部分、後者はバシユリエ試験に合格した青年フレデリック・モローが一時帰郷のためパリを河船で発ち、下船して迎えるの馬車に乗った場面である。つまり一九世紀中葉のヨーロッパにおいて馬は農事及交通の必需品としてある、ということである。写実作品であるこれらの物語においては、程度今日日常生活を叙する中で、「自転車にのって」とか「車をとめて」とかいうのと同じ意味あいでも頻出するのだといえよう。

たしかにそうなのであるが、それにつぎるのか。周知のようにボヴァリ夫人が破滅に至る道程で黒いひきがねとなった二人の人物がいる。その一人、農園主で小金持ちで色事師のロドルフが、満たされぬエマの心のすきをつくべく農事共進会のあとボヴァリ夫妻に提言したのが乗馬だったのだ。夫シャルルは単純に賛成し、二人は遠乗りに出かけることになる。

縦の木のあいだのそばの芝生の上に褐色の光が生ぬるい空気の中にうごいていた。煙草の粉のような赤い土が

足音をやわらげた。馬は蹄鉄の先でころがっている松毬まつかまを蹴りながら前にすすんだ。

「ああ、よろしよ。そういう話はもう……馬はどこにいるの？ 帰りましょう」

ロドルフは怒ったような不快そうな身ぶりをした。エマはくりかえして、

「馬はどこ？ どこにいるの？」^⑦

彼は歩きながら、この姿勢のままで女のからだをささえていた。やがて二頭の馬が草を食んでいる音が聞こえた。「ねえ、もうしばらく。まだ帰らないで。ここにいて下さい」とロドルフはいった。

ここでは馬は日常生活の必需の道具ではなく、ボヴァリ夫人の生活史における重大な屈折点の徴表なのだ。そして引用の第一文における馬の例は破滅への加速を、第二文における馬はボヴァリ夫人の心からくも潜在する日常的健康的なるものへの回帰願望を、第三文における馬は静けさとうらはらに破局に到達した（この直後エマはロドルフに身をまかせる）事態を暗示している。

彼女はほどなくロドルフに見捨られ、再び神経症に落ちむが、日を経たある時、療養対策の一つとしてすすめられ

たルアンでの観劇がもとで法律事務所書記のレオン青年と再会し、今度はルアン通いのめりこんでゆく。駅馬車『つばめ』がそれこそ不可欠のてだだ。この頃すでに生活上の破綻は迫っているが彼女の夢は果しない。

たとえばルアンへ行くのに、青塗りの二輪馬車を買ってイギリス馬に曳かせ、乗馬靴姿の馬丁に手綱をとらせたいと思った。

『感情教育』における馬の出現頻度は『ボヴァリ夫人』より大分少なく（約四十回）、一層分散しており、先にのべた生活必需品の用例が殆どであるが、第二部冒頭に描かれる馬の描写^⑧は伯父の遺産が思いがけず手に入り、勇躍再びパリへ向うフレデリックの興奮した神経を反映している。またこの作品では馬が倒れたり、斃^{たむら}れていたりする場面があるが（第二部六、第三部一）、騒然たる二月革命のバリケードのバリとつながり、犠牲者の暗示となっている。

次に『聖アントワヌの誘惑』において出現頻度数値の最高なるものは蛇であるが、この作品の場合この動物にのみ特別の意味を附与することはむづかしい。それは数値からいえば蛇が突出しているわけではなく、それに迫る数値を

もつものとして数種の他の動物があり、さらに全体として動物の種類の数性が特色であり、又周知のようにこの作品はアントワヌの幻覚のうちに展開し、殆どすべての動物は普通の意味で現にそこにあるものではない。ここで登場するすべてのもの——動植物も含めて——が隠者の信仰心を誘惑し、脅かし、突きくずそうとする意図を持つものとして幻覚において彼をさいなむ。アントワヌの道心が堅固とみえるだけに、攻撃には次々と新手がくり出されなければならぬ。かくて、読者が辟易するような多数の異教徒異端者と並んで百種をこえる多数の動物が登場するのだ。フロベールの悪しき一面である枚挙的羅列の好例がそこにある。スフィンクスやキメラ、一角獣のような架空の怪物までも多数動員されるのが特長でもある。第五章の終りで悪魔の化身であるイラリオンが「ひとはおれをへ知識」と呼ぶ^①と断言するが、神の王国においてさまざまの策を弄し人間に禁断の掟を破らせたのが蛇であったとすれば、それが頻度最多の位置を占めるのももっともかも知れない。『聖ジュリヤン伝』は動物に比して植物の出現が最も少ない作品である。作品の長さからみると、この中には動物があふれている。領主の息ジュリヤンは狩の名手である。あらゆる獲物が血祭にあげられるのだ。とある日、鹿の一

家を仕止める。弩が唸り、仔鹿はたちまちにたおされ、母鹿もその後を追う。残る矢が牡鹿の額に突きささつたが、それを物ともせず牡鹿はジュリヤンに向つて突進し、焰のような眼を輝かして長老の如く敵かに三度繰り返している。

「呪いあれ！ 呪いあれ！ 呪いあれ！ 猛々しい奴め、いまに自分の父を殺し、母を殺すぞ！」^②

鹿の予言が耳につきまとい、彼は病み、狩を止め、幾月か経った。回復した或日城内であやまって梯子の上からすべり落した剣が父を殺したかと思つた。又別の折、庭の奥の鵲と思つて投げた槍が母の長帽子を突き刺した。ジュリヤンは城を逃げ出し、野武士の群に身を投ずる。その才覚は遂に彼をしてオクシタニアの皇帝の姫を娶り、素晴らしい城館に住まわせることとなる。たまたま妃のすすめもあり、夜中に久しくたっていた狩りに出かけた留守に、今は息子を探し求めて落魄の身の両親が訪ねてきた。妃の善意によつてその寝所にねた両親を不吉な狩から帰ったジュリヤンが、妻の不義と間違つて刺し殺してしまう。

ジュリヤンは二人の喉に絡んできこえるほとんど等し

い息づかいを注意深く聴いていたが、それが次第に弱まるにつれて、また一つ、遙か遠くに、別の息がつづいてくる。はじめははっきりしなかったが、その長く引く怨むような声は、(……)あの黒い大鹿の鳴き声だとわかった。¹⁵

葬いのあと、一切を捨てた彼は贖罪の苦行に身を委ねる。

——嵐の寒夜、ジュリヤンは渡し船にのせた癩病の男を絶対の献身を以って介護し、遂に寒さで氣を失うが、その彼を抱きしめ、主イエスは青々とした空間に飛翔してゆく。

さきほどこの作品は動物であふれているといったが、苦行から昇天に至る第三章には殆ど登場しない。調べてみれば、罪と回心へのきっかけとしての動物たちであり、大鹿なのである。

『まごころ』は『聖ジュリヤン伝』とならんで短編でもあり、そこに登場する動物は五篇の物語の中で最も少ない。その中で鸚鵡が圧倒的であることは一読して誰でもすぐ目に入ることである。これはオバン夫人のお手伝いフェリシテ¹⁶の単調な生涯の末期に、信心の深まりと生活の不如意、愛する対象を次々に失ったことなどが、異様とも思えるほどの愛情執着を鸚鵡に傾注させる物語である。それが死ん

だ時には剝製にしてもらって、なおかつ生けるが如く愛情を注ぐのである。

教会では、彼女はじっと聖霊の姿を眺めているうちに、それがどことなく鸚鵡のようなところがあるのに気がついていた。¹⁵

銃声が一発、部屋の窓ガラスをゆるがせて鳴った。それは行列の頭示台へ敬礼をしてゆく郵便馬車であった。フェリシテはしばらく瞳を瞞っていたが、やがて微かな声をあげて、「あれはなんともないかしらん？」といった。鸚鵡のことを氣遣ったのである。¹⁶

病床のフェリシテがせめてものことにと、宝物の鸚鵡を教会の行列の休憩祭壇のお供えに提供したのだがそれはもはや虫くいの剝製だった。その鸚鵡に臨終間近い彼女が氣遣いを示すのだ。単調な生涯とはいえ、何かしらたえずこまかな事件が押し寄せてくる、それらに耐え、私利私欲はなれ、常に愛情を誰かに何かに注ぐ愚直なまでの女だ。彼女はあのヴィヨンの『聖母マリアに祈るバラード』の老婆そのものだ。彼女は一字だに識らぬ。『聖アントワーヌの誘惑』の知識の悪魔イラリオン——ひいてはフロベールの

自身の分身でもある——とは対蹠的だ。その安らかな臨終、物語の結末には「聖」なるものの香気がある。

三

今度は植物をみてみよう。すでにのべたように、頻度数は全体として動物よりかなり低いし、『聖アントワーヌの誘惑』『聖ジュリヤン伝』『まごころ』においては種類の数も動物よりずっとすくない。その中でいくらか目立つのは『聖アントワーヌの誘惑』の中の棕櫚と葦であるが、これは物語の舞台がエジプトに設定されていることによるだろう。大部分の植物はこの三作においては存在感が大変稀薄である。『ボヴァリ夫人』ではどうか。ポプラを例にとってみよう。

ボヴァリ夫人は庭側の窓をあけはなし、雲をながめていた。雲は西、ルアンの方角にかたまつて、黒い渦がはやくうごぎ、そのうしろから太陽光線が壁にかけたトロフィーの金の矢を射るようになすけている。空ののこりのうつろな部分は磁器のような白さだ。さっと風が吹いてポプラのこずえをゆがめたかと思うと、雨粒が落ち出した。緑の葉の上にバラバラ音をたてた。やがてまた陽が

さしてきた。牝鶏が鳴き、すずめは濡れた草むらのなかで羽ばたきし、砂上にできた水たまりがアカシアの薄赤い花を流して行った。「もうずいぶん遠くへ行ってしまうだろう」と彼女は思った^⑦。

満たされぬ結婚生活から神経症と診断され、転地をすすめられてトストからヨンヴィル・ラベールに移住した後、平凡退屈な田舎における最初の事件といつてよい公証人書記レオンのパリへの出発直後の夫人の描写である。レオンはヨンヴィル・ラベールで詩や音楽等について夫人と会話の出来る唯一の青年であり、両者はひそかに好意以上のものを感じあつたが、共にそれ以上に積極的に出られず、危惧と焦燥から青年はパリに出る決心をしたのだ。後にこの青年は彼女の心と生活に大きな屈折を与えることになる。的確で美しい上記引用文の、黒い雲の渦、風にゆれまがるポプラの梢、水に流れるアカシアの花は、エマの心の動揺、生活の不安定の子兆そのものである。しかし太陽光線がすけてみえたり、雨粒がバラバラと一時的で、またすべてが暗いわけではない。日が経つにつれ、レオンの事が後悔されますますヒステリックになるが、そんな折しもエマの前にロドルフ・ブーランジュが出現する。農事共進会のあと、策

をこらしたロドルフが健康のためにと乗馬をすすめたことはさきにもべた。好人物の夫シャルルは一も二もなく賛成し、十月初め二頭の馬が遠乗りに出かける。

かれらが立っている高みから、谷あいの平野全体が大霧から蒸発してゆく白っぽい大きな湖のように見えた。木の茂みがところどころ黒い岩のように突き出していた。霧からぬけて高くそびえるポブラ並木の列が風にゆるがされる砂浜のようだった。

こうして彼女はロドルフとの恋に、情欲にのめりこんでゆく。すぎたる熱中は遊び人ロドルフには懸念の種となる。それがまた微妙に彼女にも反映する。

男の家からの帰り道、不安げな目ざしをあたりに投げた（……）足音や叫び声や鋤の音に耳をすました。そして頭上にゆれているポブラの葉よりも青ざめふるえて、立ちどまるのだ。

父親のこと、子供のこと、夫シャルルの外科手術の失敗、商人のつけの計算書、多少の反省もまじえていろいろのこ

とがあった。しかし今や恋に盲目となったエマはもはや引返すすべを知らない。曲折のあと遂に二人は駆け落ちすることにきめる。その前夜。

「あたしを愛してくれる？　じゃ誓って」

「愛しているとも。心からだよ。かわいい人」

紫色がかったまるい月が牧場の奥の地上すれすれにあがってきた。すうっとポブラの枝の中へのぼると、穴のあいた黒い幕のようにところどころかくれた。が、また雲一つない空にあらわれて、まっ白ながやきで照りはえた。

別れたその帰り道で、ロドルフは何て馬鹿なと自嘲する。

「おれは国をとび出したり、子ども世話をしよいこんだりすることはできん。裏切りの縁切り状を受取ったエマは失神する。一ヶ月半の病床。プールニジャン師の導きで信仰の道に近づいたかにみえたが、療養目的の観劇行がきっかけで法律事務所書記レオンとの再会があり、再び情炎が燃えさかる。レオンの此のたびの積極性に対し、エマは姉弟愛を口にするのだが、それが本心か否か彼女自身にもはっきりしない。夫の父が死亡して法律書類作製の必要から

レオンの手をかりることをエマは自ら引受け、彼の住むルアンで「充実した、心地よい、すばらしい」三日間をすごす。

かれらは戸口に黒い網のつってある居酒屋の地下室に席をとった。鱒のフライやクリームやさくらんぼを食べた。草の上に横になったり、ポプラの木陰に人をさけて抱きあった。ロビンソン・クルーソーのようにいつまでもこの狭い場所、幸福にひたっている二人には地上でもっともすばらしいところと思えるここに、くらしたい。樹木や青空や芝生を見、流れる水や葉かげにそよぐ風の音を聞くのは、これがはじめてなのではなかった。が、そういうものの魅力に心うたれたことはおそらくこれまでになかったのだ。

破局に向って突き進むのはエマの心の宿命だ。嘘がつもり、負債がつもり、それが夫に知れ姑にも知れ、反射的にエマの行為は益々度をすごす。匿名の警告の手紙からレオンはエマに会わぬことを備い主に誓う。執達吏の差押え。金策の方途はつきた。公証人のギョーマンはどうか。脈がありそうだが、彼は代償を求める。「あなたはあたしの弱みにずうずうしくつけこもうとなさるのですか？ あたしはこ

まっています、からだは売りません。」

「いやらしいやつ！ げすな男！……なんて恥しらすなことをする！」エマは、街道のポプラ並木の下をいらだつ足で逃げながらつぶやいた。

あのロドルフも冷い拒絶しか示さなかった。こうして彼女はオマー薬局へ行き、砒素の瓶から白い粉をつかみとりじかに口に入れてたべるというカタストロフに至ることは周知の如くである。

引用の最後のものは別として、他の例はすべて、ボヴァリ夫人の生活においてその心の下降へのバネとなる二人の男レオンとロドルフに關聯してポプラが登場していることを示している。しかも彼女と彼等が織りなすシーンの数ある中で、重要なものすべてに立ち会うとはいえぬにしても、少くともポプラが描かれている場面は筋や心理のうごきからみて重要な場面であるとみなしうる。ポプラはエマの生活と心理の屈折点に聳え立っているのだといえよう。エマはポプラを意識することもあるが意識しない時もある。しかしポプラはエマを常に見下し見つけているということである。

ポプラと同じくらい出現するいばらとバラに關しては、

ポブラのように明瞭な位置づけはできないようである。強いていえばバラはエマの好みの花ということであろうか。ヴォビエサールの館の舞踏会に行く時鬘に一輪のバラを挿していたし、愛人ロドルフが来る日には花瓶二つにバラをいっぱい活ける。ルアンにレオンを訪ねる時は、ヨンヴェルからこっそり持ってきたバラの花を彼の顔先に投げつけたりする。しかし夫シャルルのためにバラが使われることはない。

なおバラや茨、あるいは植物のみにかかわることでないが、次の描写に注意したい。

庭は細長く、樹牆にした杏子の木でおおわれた粗壁にはさまって、茨の生垣のところまでのび、そこからさきは畑だった。まんなかどころにスレートの日時計が石の台の上につくつてある。見るからに貧相な野バラを植えた四つの花壇に左右相称形にかこまれてこれはごく実用向きの野菜を植えた四角な畑。ずっと奥のアメリカ松の木陰には祈禱書を読む坊さんの石膏像が立っている。^②

これは結婚式を終えたボヴァリ夫妻の新居になるトストの住いの庭である。さて結婚生活はエマの期待通りのものだ

ったか、どうもちがう。「シャルルの話は歩道のように平凡で、月並みな考えがふだん着のままそこを行列して行った」「ああ、なぜ結婚なんかしたんだろう。」九月の終りに事件があった。ヴォビエサールの館の舞踏会に招かれたのだ。すばらしかったこと。それだけに以後の生活はよいにうつろな気がした。冬がすぎ春が来て、また冬が来た。

天氣がよいと彼女は庭に下りた。露がキャベツの上に銀色のレースを張り、白く細長い糸筋がつながって延びていた。鳥も鳴かず、藁をかむった果樹も、壁の屋根の下に病んだ蛇のようによこたわる葡萄の木も、すべてが眠っているようだ。そのあたりに近よってみると脚のたくさんあるわらじ虫が匍つていた。生垣のそばの梅の木立ちには三角帽をかぶって祈禱書を読む坊さんが右足を失い、石膏さえ凍のためにはげ落ちて、その顔に白い皮膚ができていた。^②

同じ庭の描写であるが前者は春、後者は冬でしかも年が経っているから様相が異っているのは当然だが、前者では五種の植物(野菜は不明)の名があがり動物の名はない。後者では四種の植物(果樹名は不明)の名があがり、かつ動

物としてわらじ虫（それに比喩として葡萄を形容する蛇、鳴かずという否定態で名前があげられていない鳥）があがっている。石膏像が破損していることなどもあるが、前者には植物のみがあり、後者には動物が出てるのが大きな相違である。そして今しがた述べたように春と冬という季節のちがいでもあるが、新婚早々のみずみずしく充実した気持のエマに眺められた庭と、期待はずれのうつろな気持で眺められたそれという相異でもある。つまり動物はこの両者の比較に関する限り何かマイナスの作用を持ったものと考えられるだろう。

それでは『感情教育』における植物の様相はどうであろうか。これは『ボヴァリ夫人』よりも長編であるから、全体として動植物の出現頻度は少ないわけだが、比較的集中的にあらわれる箇所がある。たとえば第三部の一でフレデリックがロザネットとフォンテースブローにゆき、旅館にとまってフランシャルの森からシャイの丘から丘へとまわるときだ。菩提樹、黄揚、水松、芝生、松林、杜松、ヒース、かし、羊歯、ぶな、とねりこ、あかして、ひいらぎ、白樺、柏、いばら、黒ぶどう、灯心草等。これらの植物のあいまに鳩、鹿、狼、かえる、からす、栗鼠、蝶、蜘蛛、まむし、それに比喩としての亀、海豹、河馬、熊など

の動物が交錯する。郊外の森や丘という自然の中であるから当然ではあるが、同時にこの場面はフレデリックとロザネットの生の充実の場でもある。「もう一生の終りまで幸福であることを彼は疑えなかった。それほどこの幸福が自然なもので、また自分の命とこの女のからだの中にこもっているものだという気がした。」「ときおり、遠方で太鼓の音がきこえた。それはバリを防禦しにゆくために村々で打つ非常呼集だった。へああ、また騒動だな」とフレデリックは軽蔑するように憐れみをこめていった。そういう騒ぎなど、二人の恋と永遠の自然にくらべると、憐れむべきこととしか思われないのだ。」

また第二部の五、久しぶりに田舎のノジャンに帰っているフレデリックが幼なじみのルイズと語らいながら散歩するところもそうだ。ポプラや睡蓮、朝鮮あざみ等十八種の植物と犬、馬など数種の動物が登場する。この娘の心にはひたむきな愛情が芽生えており、フレデリックは生れてはじめて人に愛されていることを感じる。この二人の媒だちをしているのがまさにノジャンの自然なのだ。「あたしと結婚してくださいませんか?」「そりゃあ（と彼は口ごもる）もちろん……私のほうちゃ結構だが」。この不徹底、煮え切らなさがいつもフレデリックの挫折につながる。

いま一つ。物語の冒頭部、パリのサン・ベルナル河岸から船で故郷ノジャンへ帰るフレデリック。この船中で物語の女主人公となるアルヌー夫人と出遭うのだ。河面をすべる船上から兩岸の景色が広がる。左手は牧場がなだらかに丘までつづき、そこにぶどう畑やくるみの木、草にうずもれた水車などが見える。(……) もう少し先では四角い小塔のついた尖った屋根の城が見える。その前に花壇がずっと広がり、並木路が暗い拱廊のように菩提樹の下につづいている。「青年はこの並木路にそってゆく女の姿を眼に描いた。ちょうど、入口のオレンジの植木箱を左右においた石段の上に、若い男女が現われたが、すぐまた何も見えなくなった。」(傍点筆者)

より薄められた度合においてはあるが、『ボヴァリ夫人』におけると同様、『感情教育』においても主人公たちの愛の結節点には、それを支えるかのように、しかしさり気なく動植物——なかならず植物たちが点綴されているとみられないだろうか。

おわりに

いうまでもないことだが、『ボヴァリ夫人』にしろ『感情教育』にしろ、単純な恋愛小説であるにとどまらな

とりわけ後者は二月革命の前後にまたがる歴史小説、社会小説の趣きを有している。意図、技法、テーマ、モデル、どれをとっても複雑でいろいろの問題を含んでいることは確かだが、両作品とも主要な道きの糸である愛情の問題も含めて世俗世界のことには属することは間違いない。それに対して、もし聖と俗——そういうモチーフの区分が認められるとするなら、『聖アントワヌの誘惑』『聖ジュリヤン伝』『まごころ』の三作は聖の世界に帰属するものと考えられる。従って上来のべてきたことはフロベールにおける動物学は聖なるものに関与し、その植物学は俗なるものに関与する、ということである。ただその関与の仕方は、動物が聖なるものに否定的に関与するのであるということとは比較のみやすいことであろうが、植物の俗なるものへの関与はもっと屈折した形をとっているように思われ、単純に俗なるものへ肯定的に、プラス面に関与しているとはいえないようである。フロベールにおける聖とは何か、俗とは何かについての理解とともにさらに立入った検討が必要であろう。

註

① MADAME BOVARY, L'ÉDUCATION SENTIMENTALE, LA TENTATION DE SAINT ANTOINE, LA

LÉGENDE DE SAINT JULIEN L'HOSPITALIER, UN
CŒUR SIMPLE. 以下において引用はいずれも『レイヤ
ド版』による。

② 数え方には種々問題があると思われる。例えば『バラの花に
ついて、今現にそこに咲いているバラ、歌の題名とか何かの
名前として用いられるバラ、美しいものだとよこしてのハ
ラ、というようにいろいろの場合がありうる。本稿では一応
すべての場合を含めてバラという語を数えることをたてまえ
としたが、その視点で統一して一時に引用五作品を通読する
ことはできなかったのので、厳密性を欠き、本文にあるようにに
約、何種という表現にならざるをえなかったことをお断りせね
ばならない。また種の名前を使わずに、単に動物とか植物と
いう場合のことも今後の課題とした。

③ ちなみに、日本人作家の場合、志賀直哉の『暗夜行路』を
例にとると、動物五十七種、植物三十九種であり、動物のう
ち比較的出现頻度の高いのは山羊、犬、馬、猫等であり、植
物では松だけが稍突出している。

④ G. FLAUBERT; Œuvres. I, Bibliothèque de la P.L.F.-
IADÉ, p. 296. (以下引用は Œuvres I, II のみ) 『ボ
生島遊一訳——『ボヴァリ夫人』『感情教育』——渡辺一矢
訳——『聖アントワヌの誘惑』『聖ジュリアン伝』『まごこ
ろ』——を使用したことをお断りする)

⑤ Œuvres II, p. 40.
⑥ Œuvres I, p. 436.

⑦ Ibid. p. 437.

⑧ Ibid. p. 438.

⑨ Ibid. p. 537.

⑩ Quand il fut à sa place, dans le coupé, au fond, et
que la diligence s'ébranla, emportée par les cinq che-
vaux détalant à la fois, il sentit une ivresse le subme-
rger. (...) La lanterne, suspendue au siège du postillon,
éclairait les croupes des limonier. Il n'apercevait au delà
que les crinières des autres chevaux qui ondulaient com-
me des vagues blanche; leurs halaines formaient un
brouillard de chaque côté de l'attelage... (乗合馬車の前
仕切りの奥にやっと落ちつき、いっせいに駆け出す馬の熱々
に車が大きく揺れた時、彼はある酔心地にとげこんでゆく気
持がした。……馭車台につるした角灯が馬の尻を照らしてい
た。その向うには白く波のように揺れているほかの馬のたて
がみが見えるだけだった。馬の吐く息は両側に、白い霧を流
してゆく。) Œuvres. II, p. 132.

⑪ 《On m'appelle la Science.》Œuvres. I, p. 141.

⑫ Œuvres. II, p. 632.

⑬ Ibid. pp. 641, 642.

⑭ Felicité. 「至福」の意味がある。なおこの名前のお手伝い
はすでに『ボヴァリ夫人』に登場している。そこでは彼女は
ボヴァリ夫人の死後、夫人の衣装を盗んでテオドールと駆け
落ちしたが、それが聖霊降臨節の日だというのがマロベール

流の皮肉へあふうか。

- ⑮ Ibid. p. 617.
- ⑯ Ibid. p. 621.
- ⑰ Œuvres, I, p. 401.
- ⑱ Ibid. p. 436.
- ⑲ Ibid. p. 442.
- ⑳ Ibid. p. 472.

- ㉑ Ibid. p. 525.
- ㉒ Ibid. p. 568.
- ㉓ Ibid. p. 320.
- ㉔ Ibid. p. 349.
- ㉕ Œuvres, II, p. 359.
- ㉖ Ibid. p. 284.
- ㉗ Ibid. p. 39.